

九州大学 正会員 ○田代 敬大

〃 〃 坂本 紘二

1. はじめに

1976年の台風17号による岐阜県安八町における長良川破堤水害は、近年まれな大河川の決壊と輪中地帯における災害ということで耳目を集めた。この水害の被害状況等については、すでに多くの報告がなされている¹⁾ので本論においては、かつての輪中地帯という側面からこの災害の意味するところを検討する。

ところで、一般的に災害においては、古くからの「本家」よりも新しい「分家」の方が被災する率および被災程度が大きくなる傾向があるといわれている。またこれは拡張して本村(あるいは自然集落的)の方が分村(都市的)よりも災害に強い立地性を示すことが多いということでも知られている。今回の災害においても一つの集落内においては本家よりも分家の方が、自然集落的な諸集落が多い安八町よりも都市的な墨俣町の方が、あるいは墨俣における旧集落よりも岐阜大垣国道沿等の新興住宅地の方が、浸水被害が大きい傾向が見られた。

しかしながら、同じような自然集落的性格を有するそれぞれの集落間においては、その景観の微妙な差異と共に、必ずしも上述のような傾向が見られるとは限らなかった。例えば本破堤において浸水を免れたB地区(図-2)では、さ程の集落は見られない。しかもこの地区は旧輪中堤防の堤外地であった(図-1)。

そこで、この地域の地形状況および集落の立地性を輪中の形成過程との関連で論述してみよう。

2. 安八・墨俣における輪中堤防の形成概要

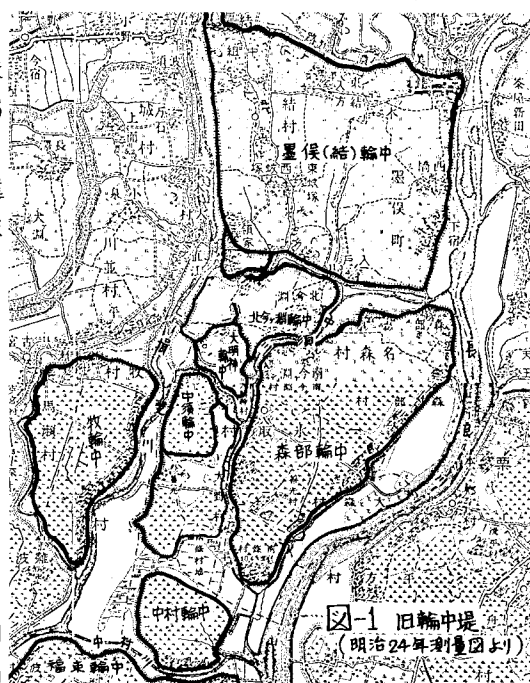
現在木曽三川と称せらる木曽・長良・揖斐の三川は、かつては中・下流域においては互いに連絡し網状に流下していた。その河川の自然堤防上に立地した集落間において、通常生産基盤として利用される後背湿地を囲む形での自然堤防上に輪中堤を築造し、その補強・拡大を重ねると共に、集落・田畑等を完全に囲い込む堤防(懸廻堤)が形成されていった。今回の災害における対象地域の輪中は、墨俣(結)・森部・中須・大明神・北今ヶ淵・中村・牧である。この中で牧・墨俣は古い輪中であるが、他の輪中は下流域の干拓輪中と共に、その成立展開は比較的新しく、「自然堤防地帯の輪中」²⁾が有していた性格を端的に示す地域でもある。

これらの輪中堤の形成は歴史的・地形的諸条件の下で進化したもので一概にいえないが、ここでは、そのほぼ完成期のみを示す。

森部輪中・中須輪中の発祥は定かでない。前者は正保年間から寛文5年(1665)の間といわれ、後者は宝永2年(1705)には村の下流側の堤防を欠く「形」のいわゆる「尻無堤」が完成しているが、懸廻すのは他に遅れて天保10年(1839)頃である。

中村輪中の経緯は複雑で、宝永年間までには(1710頃)小区域の懸廻を完了していたが、最終的な懸廻堤は天保12年(1841)頃である。

大明神・北今ヶ淵は集落としては古いと思われるが、前者の懸廻は文政9年(1826)頃、後者は揖斐川沿が微高



地となっていたため、中須川沿に安成年間(1854~59)に築堤している。

3. 輪中の形成と地盤高

図-2に以上の輪中堤防と浸水地の地盤高とを重ねてみた。まず浮び上がってくるのは、輪中を一つの区域として見た時の形成順序(牧→墨俣→森部→中須→大明神→北ヶヶ淵)とその地盤高との対応である。「--新輪中は旧来の輪中と比べて小面積であり、隣接する旧輪中の堤内地に比べると相対的に耕地が高いのを普通とする⁴⁾」⁵⁾ということが明瞭に認められる。

また、この天井川化を考慮すると非浸水区Aの牧輪中においては、輪中堤を壊さなかったためというよりも、土砂の堆積で堤外地の自然堤防が発達していたため、浸水から免れたといえる。

さらには、これらの堤防形成時の追跡から逆に、かつまの堤外地⁶⁾の堆積土量の推定も不可能ではないかもしれない。

さまた、この地域における土砂堆積の要因であるが、(1)地形的にこの地域が扇状地からデルタ地帯への遷移領域で、長良・揖斐が接近し、その間の氾濫原は洪水時においては、まず揖斐から長良への、次いで長良から揖斐への洪水で氾濫を繰返したであろうこと、(2)他

輪中の成立により氾濫原が減少していったこと、また宝暦治水による大樽川の洗堰で、特に長良川の流下が遅くなったこと、(3)歴史的に、地形上および政治的(複雑な藩領、他輪中との輪中論争)に氾濫原を余議なくされ、築堤が遅れたこと、等が挙げられる。

4. おわりに

本水害は、正しくこの輪中地域の土砂の堆積過程を顕にしたのであり、浸水被害も基本的には、この地盤高と集落の立地性——歴史的過程における人間と自然との応答関係による地形変化——に依存しているといえる。そして、「本家・分家」の関係、新旧輪中集落の現象としての被害状況の逆転、さらに都市化地区の被害の意味も歴史的過程を追うことにより一貫して来ると思われる。

これら輪中が問いかける諸問題について、例えば河川・地域計画の現代的課題として、輪中・郷土研究の成果を基に今後も考察を試みていきたい。

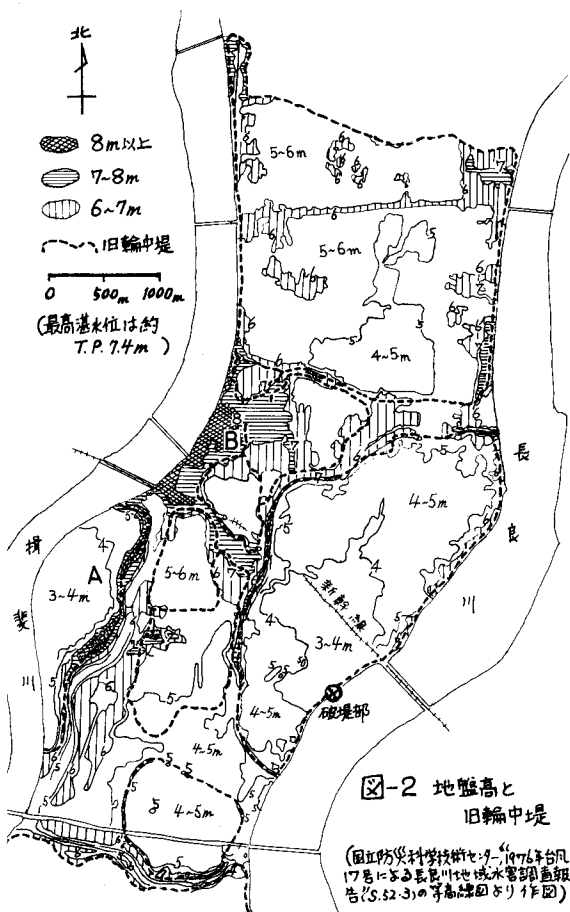


図-2 地盤高と旧輪中堤

(国土防災科学技術センター、1976年台風17号による長良川地域水害調査報告(S.52-3)の等高線図より作成)

註 1) 「1976年台風第17号による長良川地域水害報告(主要災害調査第12号)」(1977年2月、国土防災科学技術センター)、その他。

2) 例えば集落によって盛土高、家屋形態、屋敷森その他の景観に微妙な差異がある。

3), 4) 安藤萬壽男編著・輪中研究グループ「輪中—その展開と構造—」(古今書院 1975年)

5) このことは、既に同地域において安藤萬壽男教授によりほぼ同趣旨の指摘がなされている。同「輪中地形とその土地利用の変遷」(地理学評論 25-7, 1952年)

6) 中須川・中村川の締切、揖斐川の収束東への付け替えは明治改修においてである。

その他参考文献: 「安八町史」, 「石森村史」, 中澤・秋山・山田「輪中聚落地誌」(日本農村問題研究所, 1936)